

世代をつなぐ熊本の心

指先で

地唄三弦の 音色を磨く。

宇土市本町三丁目

石井

方二さん (65才)

方浩さん (34才)

方邦ちゃん (2才)



方邦ちゃん



長さにしてわずか十センチ。幅一、二センチ程の小さな駒。実はこれが、あの地唄三弦の微妙な音色をつくるのだ。素人目にはさほど重要とも思えない駒なのだが、細部をじっくり眺めて見ると、そこには驚くほど細かな技巧が秘められている。三曲界のお師匠さんたちの垂涎の的。

——石井駒である。

日本でただ一軒。宇土市に地唄三弦の駒と撥をつくっている店がある。石井方二さん六十五歳(現・県伝統工芸協会会長)。昨年、全国植樹祭で来能された天皇陛下が県伝統工芸館で視察の折、陛下の前で実演された方二さんといえば、ご記憶の方も多いと思う。

石井さんは、十三歳でこの道に入り、十五歳で父親房吉さんの跡を継いだ。以来五十年。いかにして、いい音色をつくりだすか、文字どおり

心血を注いできた。

石井さんがつくっている駒と撥は、地唄や民謡の三味線のそれとは、まるで趣を異にする。地唄の特色を、充分に表現できるような工夫が、随所になされているのだ。他の三味線がどちらかといえば、とびはねるような音を特徴とするの比べ、石井駒石井撥がつくりだす音色は、音幅が広く、渋く、艶があり、しかも余韻を残す。

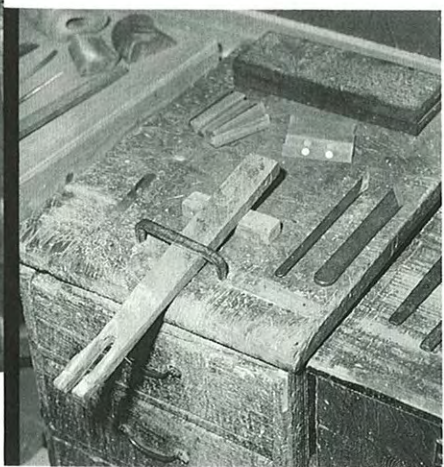
もともと駒は、三味線の弦と胴の間であって、弦の微妙な振動を胴に伝える小さな部品である。しかし、部品というにはあまりにも手がこんだ工芸品である。

水牛の角を切り、削り、磨きあげて穴をあけ、なめらかな曲線と光沢をもたせ、下部の二か所を小さくくりぬき、鉛や銀、金の重みをつけてつくりあげる。そのすべてが石井流

で、各工程が、うまくいかないと、いい音色はでないという。まさに地唄三弦の命である。

寒暖の季節に左右されるだけでなく、大変な根気と集中力が要求される手仕事である。

後を継ぐ息子の方浩さんは、「どんなに父の真似をしても、父と同じものはまだつけれない。つくる速さも違う。年季といつてしまえばそ



方二さん



方浩さん



れまでだが、父の域にどうやって近づくかが課題」という。

いい音色をだす駒をつくるには、名手の演奏を聴いてそれを心で覚える以外に手はないという。若い頃の石井さんは、名手と呼ばれる人々と深交を持ち、三弦音の研究にも打ちこんだという。五感を耳にして学ぶということか。

一方、方浩さんも邦楽に関しては造詣が深く、十年前に東京のテレビ局勤務をやめて帰郷し、この道に入った。三弦の音が、方浩さんと呼ばれるのかも知れない。

後継者は、大丈夫のようだ。方浩

さんの後には、長男方邦くん二歳がいる。仕事場にちよこんと座り、やり取りを持つ手つきに、その素質ありと見た。

悩みは、材料の入手難である。撥に使うべつこうや象牙、駒に使う水牛の角が、近年なかなか手に入りにくい。しかも、水牛の角は、入手しても最底十五年は寝かせ、天然乾燥が必要だという。そのせいか、いま注文をうけても「さて、何年先になりませうか」と、石井さん。現代生活のスピードに慣れてしまった私たちには信じ難い返事が帰ってきた。いい音色を得るには、ただ待つしかないよ

うである。

出来上がった品は、わずか数センチである。しかし、石井駒と石井撥が削りだす、三弦の音の世界は、限りなく広く、そして果てしなく、深い。